

復帰の横顔 - 日本人の横顔、沖縄人の横顔

4月下旬、久しぶりに帰り、沖縄の政治状況についていろんな人に話を聞くことができた。

特に翁長知事を支える沖縄の経済界の人達の考えを直接聞いたことで、今までの沖縄とは違う沖縄へ向かって進もうとするエネルギーを感じた。

ある企業のトップのひとは海兵隊の機能に抑止力が存在しないことをあげて、沖縄の米軍基地の75%を有する海兵隊基地は撤去可能であると具体的に基地を減らすことを提案していた。また、ある会社の会長は、「私たちは日本人なのか？」と自ら問うことなど今までにはなかったと語りながら、沖縄の自立について沖縄人ひとりひとりが自立しなければ沖縄の自立にならないとの強い意志をにじませていた。

戦後70年、なぜ日本の平和運動によって沖縄の米軍基地が減らないのか。

いま、日本人である高橋哲哉さんは「沖縄とどう向き合うのか？」と問い、沖縄人自身もまた「日本とどう向き合うのか？」を問う。

「戦争の横顔」という言葉がある。

戦争を正面から見れば誰もが残酷で醜いと答えるが、では戦争の横顔はと聞かれると、そんなことを考えたことがないので戸惑ってしまう。少し考え続けるとあるイメージが浮かんだ。「戦争の横顔」が、平和な表情を浮かべ平和のためと平和を守る人達でいっぱいになっているように思えたとき、自分自身の顔もそこにあるのではないかと不安におそわれた。

見えているものは事実の一部でしかない。

「戦争の横顔」も重要な事実である。

- 高橋哲哉 プロフィール -

1956年、福島県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科教授。哲学や「人間の安全保障」などを教える。沖縄の米軍基地問題についても発言を続け、6月には集英社新書で『沖縄と米軍基地 「県外移設」を考える』を出版予定。

ベストセラーとなった『靖国問題』(ちくま新書)ほか著書多数。近著に『憲法のポリティカ』(共著、白澤社)、『犠牲のシステム 福島・沖縄』(集英社新書)、『いのちと責任』(共著、大月書店)、『犠牲の死を問う』(共著、梨の木舎)、『3・11以後とキリスト教』(共著、ぷねうま舎)、『フクシマ以後の思想を求めて』(共著、平凡社)などがある。